

C. S. ルイス：キリスト教弁証の諸相

—自由意志について—

高橋 清隆

日本大学大学院総合社会情報研究科

Aspects of C. S. Lewis as a Christian Apologist

—Chiefly on Free Will—

KIYOTAKA Takahashi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

C.S.Lewis is well known as a Christian apologist as well as a fantasy author. In his works, he repeatedly mentioned what free will is. Free will is one of the most important theological concepts when we try to assimilate Christianity. But it is so difficult to gather up Lewis's opinions about free will from his works, and to clarify the concept, for he did not systematize a systematic theology.

The purpose of this paper is to examine Genesis Chapter 3 and Augustine's "*De libero arbitrio*," and to verify that C.S.Lewis accepted Augustine as a thoughtful forerunner in the problem of free will.

Finally, I assert that the idea of Lewis's free will and most of his discussions on free will are based upon Genesis and Augustine. In this sense, Lewis was not only loyal to the Bible but also an orthodox and traditional defender of Christianity.

1.はじめに

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) は、オックスフォード大学モードリン・コレッジのフェローであったとき、『愛のアレゴリー』(1936)や『『失楽園』序説』(1941)などの学問的著作の他に、ファンタジー作家として『沈黙の惑星を離れて』(1938)、『ペレランドラ』(1943)などの作品を発表しているが、キリスト教弁証家としても『痛みの問題』を初めとして『悪魔の手紙』(1942)、『キリスト教の精髓』(*Mere Christianity*, 1952)など多くのキリスト教弁証作品を著した。

本稿の目的は、ルイスの著作に見てとれる自由意志についての見解を検証することにより、キリスト教弁証家としてのルイスの一面を明らかにすることである。

まず、自由意志とは何かについて提示しておくべきだろう。自由意志はある事典によれば次のように定義されている。

ある行為をするかしないかを決断する人間の能力。霊的な存在者としての特徴である。決定論では説明できない自由の意志としてあらわれる。義務、罪、罰のような道德秩序の基本概念は意志の自由がなければ無意味であろう。他方意志の自由があるからといって、人間が常に自由に意志するわけではない¹。

これを敷衍すれば、人間には自由意志という能力があり、罪や罰はそれと深い関係がある、という考え方である。

一方、ルイスの自由意志に関する考えが簡潔に述べられている箇所があるので、それも見ておきたい。

悪魔はもと善天使であったし、この世界もまたもとは善い世界であった。が悪魔が、神から

¹ 小林珍雄編『キリスト教百科事典』ヘンデル代理店エンデルレ書店、1960、p.128。

与えられた自由意志を悪用して、神に反逆したところから、この世界の一切の悪が生じて来た。これがキリスト教の世界認識であり、また悪に関する最も納得の行く方法である²。

まず第一点目として、悪魔の存在が挙げられる。ルイスは、元は善天使であった悪魔が自由意志を悪用したため世界の一切の悪が生じたとする。このことは先に見たように、罪や罰は自由意志に関係がある、という説明と一致するように思われる。第二点目として、第一点目で述べたことが、キリスト教の世界認識であるとする。キリスト教の主要な宗派はカトリック、プロテスタント、正教会であり、またプロテスタントは多くの分派に分かれているが、そのほとんど全てがそれに同意するとルイスは言う。

ルイスが伝えようとしていたキリスト教は生一本のキリスト教 (mere Christianity) である。それを伝えるために『キリスト教の精髓』を刊行した。この著作の発表に際して、ルイスの伝えようとするキリスト教が中道を保っているかどうかを確認するために、英国国教会派(Anglican)、メソジスト(Methodist)、長老派(Presbyterian)、ローマ・カトリック(Roman Catholic)の四人の聖職者に原稿を送り批判を求めたが、概ね五人の意見は一致していることを確認した³。次の見解は至当であろう。

ルイスの神学は、意図的に、正統的で伝統的であり、聖書と世界教會的な信条に忠実である⁴。

さて、ルイスの神学は正統的でキリスト教の伝統に則ったものであるからなのか、ルイスの神学は保守的神学者により自説を展開するために用いられたことがある⁵。それは初期教父であるアウグスティヌス

ス⁶についてルイスが大部分の聖職者たちよりも、かなり深い知識を持っていたことに起因するかもしれない⁷。

では、ルイスの考える自由意志も正統なキリスト教の伝統に沿っているといえるのだろうか。この点に関して、本多は次のように言う。

ルイスは護教論においては、悪の存在をもっぱらアウグスティヌスの『自由意志論』によって説明し、SF『ペレランドラ』においても、金星を舞台に、創世記の物語から着想を得て、人間の墮罪が創造主に与えられた自由意志にかかっていたことを強調している⁸。

本多は、ルイスの自由意志に関する見解は創世記と正統派教父であるアウグスティヌスに依拠していると述べているが、そうであれば、ルイスは自由意志に関しアウグスティヌスの考えをどのように受け継いでいるのだろうか。

そこで、自由意志についての見解の歴史的背景を、旧約聖書、アウグスティヌスの自由意志論を検証することにより、ルイスが自由意志についてどのように考えていたかを明らかにしていきたい。本稿で用いる聖書の引用は特別な場合を除き日本聖書協会『聖書—新共同訳』に依拠する。

2. 聖書に見る自由意志

聖書の中に自由意志という言葉自体は出てこないが、自由意志を用いたことに関する記述が創世記3章にあるので見ておきたい。

pp.292-293。

⁶ アウグスティヌスの圧倒的な影響下に西方教会の教理は成立し、ルターもアウグスティヌスの影響を強く受けていた。(鈴木浩著『アウグスティヌスとルター (義認論を中心に)』ルター研究 7、ルーテル学院大学、2001、p.104。

⁷ ウォルター・フーパー著、山形和美監訳『C.S.ルイス文学案内事典』彩流社、1998、p.233。

⁸ 本多峰子著『悪の問題にむかう——神学と文学における考察に関する試論』二松学舎大学国際政経論集 9、2001、p.150。

² 柳生直行著『お伽の国の神学』新教出版社、1984、p.115。

³ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改裝版、p.8。

⁴ John D. Heigh “The fiction of C.S. Lewis” Thesis for the degree of Doctor of Philosophy, The University of Leeds, 1962, p.69.

⁵ 柳生直行著『お伽の国の神学』新教出版社、1984、

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。（創世記 3 章 1～7 節）

ここで園の中央に生えている木の実をめぐって女、男、蛇、が登場する。文脈を見るならば、女はエバ、男はアダムという名を持っていることがわかる⁹。蛇は、悪魔の比喩的名称や蛇の形をとった悪魔でもなく、本物の蛇が悪魔によって用いられたものであるという見方がある¹⁰。中央の木の実を食してはならないという命令は、毒を含んでいるので食べてはならない、ということではなかった。そのような意味では食用可能であった。この木の実が食することを禁じられたのは、神の意志に対する人間の従順さを試す単純な試験としてであった¹¹。この聖句を要約すれば、悪魔は園の中央にある木の実を食べるならば、決して死ぬことがなく神のように善悪を知ることができる、とエバを唆し、エバは悪魔の言を躊躇なく信じ、その実を取って食べ、夫であるアダムに

与え、そしてアダムも食した、というものである。エバは悪魔に唆された結果、禁断の実を食したとあるが、同様にアダムも唆されたのだろうか。パウロの言葉がこのことに関しての示唆を与えているので見てみたい。

しかも、アダムはだまされませんでした、女はだまされて、罪を犯してしまいました。（テモテへの手紙一 2 章 14 節）

パウロは、アダムは悪魔に騙されなかった、という。これを換言してシーセンは「女は欺瞞により、男は情愛によって墮落した」という¹²。もしシーセンが正しければ、アダムは神よりもエバに対する情愛を選んだが故に墮落した、ということになる。それはアダム自身が神に背く行為になることを知りながら、誰にも強制されず、自らエバを選んだということである。ここに自由意志の行使があると思われる。

つまり、最初に禁断の実を食べたのはエバであるが、彼女は悪魔に唆されたのであり、人類史上最初に自由意志を濫用したのはアダムで、その結果、実を食したとする考え方である。聖書は、一人の人を通して罪が世に入った、その結果として、死が入ったと教える¹³。その一人の人とはアダムであり、その罪とは神が禁止した木の実（善悪を知る木の実）を食したことであり、結果として、神に背いた人間の自由な行為が墮落に向かわせたという。要するに、人間の自由意志が罪を引き起こしたという考え方である。では次にアウグスティヌスがどのようにこの考え方を受け継いだのか見てみたい。

3. アウグスティヌスに見る自由意志

アウグスティヌスの『自由意志論』を考察するにあたり、まず、彼について触れておきたい。アウグスティヌス (Augustinus, 354-430) はヒッポの司教で

⁹ 創世記 3 章 12、20 節。聖書によれば、人祖はアダムとエバである。アダムが犯した罪の結果が、子孫である人類に伝わった。それで人は生まれながら原罪を負っている。（小林珍雄編『キリスト教百科事典』ヘンデル代理店エンデルレ書店、1960、p.584）

¹⁰ ヘンリー・シーセン著、島田福安訳『組織神学』リパブックス、2009、p.417。

¹¹ 同上、p.418。

¹² ヘンリー・シーセン著、島田福安訳『組織神学』リパブックス、2009、p.419。

¹³ ローマ信徒への手紙 5 章 12 節、コリントの信徒への手紙一 15 章 22 節。

あったことから、他のアウグスティヌスと区別するため、ヒッポのアウグスティヌスとも呼ばれた西洋古代最大の教父であった。ローマ帝国の属州北アフリカのタガステで父パトリキウス、母モニカの長男として生まれ、マダウラで文法学、北アフリカのカルタゴで修辞学を学び、19歳の時、キケロの『ホルテンシウス』が契機となり、マニ教徒として9年間過ごした。しかし、カルタゴ、ローマ、ミラノで修辞学教師であった頃、懐疑主義、新プラトン哲学に触れ、マニ教を離れた後、アンプロシウスとの出会いにより、386年にキリスト教に回心した。母モニカの死後、故郷に帰り(388)、ヒッポで祭司(391)、司教位に就いた。教会の教師、また指導的神学者として、マニ教批判、アカデミア反駁、また、ドナートゥス派およびペラギウス主義者らとの論争や活発な著作活動を行い『秩序論』(De ordine, 386)、『ソリロキア(告白)』(Soliloquia, 386)、『自由意志論』(De libero arbitrio, 388-39)、『告白録』(Confessiones, 397-400)、『神の国』(De civitate Dei, 413-423)などを残した¹⁴。

ルイスは自由意志を考察するに当たって、悪の存在をもっぱらアウグスティヌスの『自由意志論』によって説明したことは、前述の通りである。ここで『自由意志論』についてさらに見ておきたい。

『自由意志論』はアウグスティヌスとエヴオヂウスの両者の対話形式によって議論が展開される三部構成になっている。

第一巻は、神は悪の造り主ではないかどうかについて、どうぞ、私に話してください、と唐突に問うエヴオヂウスの言葉から始まる。その間に答えるに際し、アウグスティヌスは、神は善であり、悪い行いはしないことを強調し、その後、悪には二種類あり、第一の悪は、悪を行うこと、第二の悪は、悪を被ることであることを明らかにする。被る悪とは神が与える罰のことであり、その悪は神に起因するが、悪行に関しては、神にではなく、それを行った人間自身に原因があるとする。その後、人間が悪い行いをするのはなぜかという質問が提起される。この問

題は長期間にわたりアウグスティヌスを悩ませ、同時に疲弊させたものであるが、ある順序をもって解決を見た。以下、アウグスティヌスがたどった順序に従い議論が展開される。

まず、悪を定義することから始めるが、考察の結果、悪は欲情のうちにあることが明らかにされる。欲情は精神によって正しく支配される¹⁵。しかし、精神が欲情の従者となる場合がありそれを可能としているのが自由意志であるとする¹⁶。

その後、法が二つあることが確認される。人間が作る可変的な法を時間的な法と呼び、神の摂理に拠る、最高の理性と呼ばれる法を永遠の法と呼ぶ。この永遠の法により時間的な法も正しく制定され、正しく変化し、また永遠の法によってあらゆるものが秩序づけられているとする。善人は永遠の法によって幸福になる。人を不幸に陥れる行為は、永遠のものをなおざりにして時間的なもの、つまり人間の最も安価な部分である肉体によって感ぜられるものをあたかも確実な物で、偉大で驚嘆すべきものであるかのように追及することである。そしてそれを罪であるとする¹⁷。その罪を可能ならしめるものが自由意志であるとする¹⁸。

第二巻では、神が人間に自由意志を与えた理由が示される。自由意志により人間は罪を犯すのだが、自由意志がなければ人間は善を行うこともできない。つまり人間が善悪を正しく認識し行動するために神は人間に自由意志を与えたという¹⁹。

また、自由意志は中間善であることが示される。その理由は、自由意志は神が与えた善ではあるが、その自由意志により甚だ悪い仕方生活する者がいる一方、自由意志無しには、人は正しく生活することができないからとする²⁰。

第三巻は、自由意志の付与者である神は、それにより人間が罪を犯すことを予知していたが、罪の原

¹⁵ アウグスティヌス著、今泉三良、井澤彌男訳『自由意志論』創造社、1972、p.38。

¹⁶ 同上、p.41。

¹⁷ 同上、p.67。

¹⁸ 同上、p.68。

¹⁹ 同上、pp.74-75。

²⁰ 同上、p.164。

¹⁴ 『キリスト教人名事典』日本基督教団出版局、1986、p.9。

因は神に帰されるのではなく、人間の自由意志によるものであることが強調される。その理由の一つとして、神は人間の罪を予知することができるが神は人間に罪を強制させるのではなく、ただ単に予知するだけであることが示される²¹。アダムの原罪の心理にも触れる。アウグスティヌスはアダムが神に従うか悪魔の誘惑に屈するかはアダムの決定であるとするが、主が命じられようとした事柄も、蛇が唆しようとした事柄も人間の力の中にはなかった、つまり自由意志の対象は外界に拠るとする²²。また、悪魔が墮天使になった理由にも触れる。悪魔の精神に、あるものが入り込み、それが悪いことを企てた結果であるが、そのような意図は一体どこから入り込んだのかということが問われる。一つは誘惑者の意思から来るもの、他の一つは精神の注視や身体の諸感覚に表れるものから来る。つまりそれは精神そのものであり精神が支配する体であるとする。また悪魔は高慢の罪により断罪されているとする²³。

アウグスティヌスの『自由意志論』は神を賛美することのうちに、またそのうちに開かれてくる「意志の自由」ということにこの作品の主眼があったのだが²⁴、まとめると次のようになる。

(1) 神は善であり、善きものの源である。したがって悪行は神に起因するものではない。

(2) 罪は永遠の法である神の摂理に従うことよりも滅ぶ運命にある人間の法に従うことであるが、罪を犯すことを選択させることを可能とするのが自由意志である。

(3) 神が自由意志を与えた理由は、正しく生きるためであるが、それは罪を断罪し正義を賞するためであった。

(4) 自由意志は中間善である。

(5) アダムが自由意志を働かすには対象が必要

であった。しかしアダムは自由意志を誤用したため罪を犯した。

(6) 悪魔が墮天使になった理由は自由意志の濫用によるのであり高慢により断罪されている。

では、ルイスはどのように創世記やアウグスティヌスに見る自由意志を受け継いだのだろうか。

4.C.S.ルイスに見る自由意志

ルイスは組織神学を意識して企てなかったため、ルイスの信仰論を体系化するには困難を極める²⁵。多くの彼の宗教的著作の中にちりばめられている自由意志に関する考えを体系化するためには、ある基準に沿って考えるのが得策であると思われるが、本稿では創世記に見る自由意志と前項でまとめたアウグスティヌスの自由意志を基準としてルイスの自由意志論に迫ることにしたい。

4.1 ルイスの自由意志と創世記の記述

ルイスがどのように自由意志に関して創世記を受け継いでいるかを以下に見てみたい。

自由とは過ちを犯す自由もふくみます。事実、人間は過ちを犯し、神からの贈り物を濫用して、悪をなしてしまいました。そうして人間が神に与えられた自由意志を濫用した結果、世界に痛みが入りこんだのです²⁶。

人間が罪を犯したが故に世界に痛みが入り込んだ、という箇所はローマ信徒への手紙5章12節や、コリントの信徒への手紙一15章22節の記述と類似する。これらの聖句は創世記に拠を求めたものである。別の箇所でルイスは、キリスト教では人間が自由意志の濫用により自ら悪しき者になった、ということは今更述べるまでもないとして、キリスト教徒の中ではあたかも自明であるかのようにもいう²⁷。

²¹ アウグスティヌス著、今泉三良、井澤彌男訳『自由意志論』創造社、1972、pp.190-193。

²² 同上、p.297。

²³ 同上、pp.298-300。

²⁴ 菊地伸二著『アウグスティヌスにおける「意志の自由」——『自由意志論』を中心に——』名古屋柳城短期大学研究紀要第21号、1999、p.102。

²⁵ 竹野一雄著『C. S. ルイスの世界——永遠の知恵と美——』彩流社1999、p.9。

²⁶ C.S.ルイス著、本田峰子訳『偉大なる奇跡』新教出版社、1998、p.221。

²⁷ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出

これらのことはルイスの自由意志に関する考え方が彼独自のものではなく、聖書から受け継がれているものであり、その考えはアウグスティヌスと一致するように思われる。では、ルイスはアウグスティヌスの自由意志論をどのように受け継いでいるのか検証したい。

4.2 神は善であるか

この点に関し、ルイスは次のように言う。

神は決定的に「善」あるいは「義」なる神であり、敵味方のいずれかにくみし、愛を愛し、憎しみを憎み、われわれにある仕方（他の仕方ではなく）行動を求める神である²⁸。

ルイスは、神は善なるものであるという考え方はクリスチャンに受け入れられてきたものとする²⁹。また、他の箇所ではルイスは被造物である人間に関連して神の善について触れている。

被造物にふさわしい善とは、それ自身を創造主に委ねることです——つまり自分が被造物であるという事実において示されている関係を知情意のすべてにおいて具現することです³⁰。

自分自身を創造主に委ねるという言葉、ルイスは、われわれの自我そのものを神に委ねる³¹、あるいは自己放棄をする、と換言する。それは、われわれの自己の一部ではなく全てを神に返すことを意味する³²。それこそが善であるという。ルイスは神に

自己を委ねることを『キリスト教の精髓』の中で別の言葉で表現している。そこで塩に関するたとえを持ち出し、塩は食物の風味を引き出すが入れすぎると台無しになる。だがキリストを入れすぎてもそうならないという。

わたしたちが「自己」というものを除去して、キリストに自己を支配してもらえらうほど、わたしたちはますます本当の自分になることができるのである³³。

人間は各々自己を持っている。その自己を完全な仕方に近い状態にするには自己放棄の後、そこにいわば神を投入し、神に支配してもらうことが必要であるという。神は善であり、その善は被造物を自己本来の姿にすることができるものであるという。ルイスはこのことの始まりが、人間社会ではなく天にあることを示す。

こうした善（創造主に自らを委ねること）は、被造物よりはるかに高い次元において始まっているということを指摘しておきましょう。父なる神がその愛によって永遠に子において生みだしたもうものを、子なる神は子としての服従によって、父としての神に永遠の昔から返しておられるのです。これこそ被造物たる人間が模倣すべきパターンで、樂園における人間はまさにその通りに行っていたのでした³⁴。

最初の人間男女は樂園において、天でなされていたのと同様、本来の所有者に帰属するもの、つまり自己を神に返していた。この行為は機械的に行われていたのではない。それには意志が必要である。ル

版社、2012 改訂新装版、p.64。

²⁸ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改訂版、p.73。

²⁹ 同上、p.73。

³⁰ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p.114。

³¹ C.S.ルイス著、西村徹訳『栄光の重み』新教出版、2004 新装版、pp.199-200。

³² C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p.115。「神に返す」という表現から、われわれの自己も本来はわれわれ自身のものではなく神のものであるという考えが窺える。

アウグスティヌスは所有者に本来帰属するものを返還することを正義という。（アウグスティヌス著、今泉三良、井澤彌男訳『自由意志論』創造社、1972、p.49。）

³³ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改訂版、p.336。

³⁴ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p.115。

イスはそのことを指摘し、人間は自らの意志によりこれを選択し、行ったのであるとする³⁵。またこの自己放棄は苦痛なものではなくむしろ甘美を伴っていたとルイスは考える³⁶。

今まで見てきたように、ルイスはアウグスティヌスと同様に、自由意志についての議論を踏まえて、神は善であり、善の付与者でもあるとするのである。

4.3 自由意志の条件

アウグスティヌスは、自由意志を働かすには対象が必要であり、自由意志により誤った対象を選択し罪を犯すという。ではルイスはどうであろうか。

この点に関し、ルイスはまず被造物の自由には選択の自由も含まれるとし、選択という行為には他者の存在が必要であるという³⁷。その後、自己意識には他者の存在が必要であることを説明する³⁸。これらのことから判断すれば、ルイスの考える自由意志は対象が必要であるというアウグスティヌスの意見と一致するように思われる。しかし、ルイスはそれだけにとどまらず、自己意識と自由はどのような条件で生じるかという点にも触れる。その条件とは何か。

自己意識と自由にとって最小限度必要な条件は、被造物が神を認識すること、またそれ自身を神とはっきり異なるものとして理解することでしょう³⁹。

ルイスは対象として神を認識すること、被造物と神は全く違う存在であることを認めることによって自由意志が行使されたとする。そのことは、最初の人間アダムが遭遇した木の実を食べるか食べないかという選択にあらわれる。それは、神の与えた命令を選択する、つまり、それは神という源から発せられていることを認識しそれを選択するか、それより

も自分の妻を優先する、つまり、それは神に源を発しないということを認識し、それを優先するかどうかという二者択一を迫られたということである。その二者択一がアダムの自由意志の行使を誘発させたと思われる。

アウグスティヌス同様、ルイスも自由意志を働かすには対象が必要であり、その対象とは永遠のものである神か、それとも滅びるものかの二者択一であることを示す。

4.4 神が人間に自由意志を与えた理由

この問題に関してルイスは次のように言う。

なぜ神は人間に自由意志を与えたもうたのか。その理由はこうだ——自由意志は確かに悪を可能にするが、しかしそれはまた、持つに値する愛や善や喜びを可能にしてくれる唯一のものだからである。自動人形——つまり機械のように行動する生物——の世界は、わざわざ創造するに値しないだろう。神が、自分の造った高等生物のために意図した幸福は、自由であることの幸福、愛と喜びの陶醉のうちに——これに比べたら地上の男女間のどんなに恍惚的な愛も水割り牛乳にすぎない——自発的に神と他者にと結びつくことの幸福なのである。そして、そのためにはどうしても彼らは自由でなければならぬのだ⁴⁰。

ルイスは、神が人間に幸福になって欲しいと願っており、自由意志を用いて神と結びつくことが最高度の幸福であり、それが、神が人間に自由意志を付与した理由であるという。

またルイスは次のようにも言う。

彼らに賛美してもらうためでしょうか？しかし、機械仕掛けの賛美は単なる騒音にすぎない。彼らを愛するためでしょうか。しかし、彼らは本質的に愛の対象とはなりません。人形を愛す

³⁵ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p145。

³⁶ 同上、p.101。

³⁷ 同上、p.27。

³⁸ 同上、p.28。

³⁹ 同上、p.28。

⁴⁰ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改訂版、p.88。

ることはできないからです。だから神は人間に自由意志を与え、人間が自分の努力で徳を磨き、自由な道徳的実存として、神の愛を受けるにふさわしい対象となるようにしたのです⁴¹。

神が人間に自由意志を与えた理由は、理性あるものとして神から愛の対象とされるためであるという。そのことを『悪魔の手紙』の中では、神が人間を「自由な魂をもった」愛する者にしようとしていると強調する⁴²。

これに対して、アウグスティヌスは神が人間に自由意志を与えた理由は人間が正しく生きるためであり、神が断罪するにも賞賛するにもこの善が必要であるとし、論点を神中心に考えているように思われるが、ルイスは神から愛され、神との完全な結び付きを可能にし、究極的な甘美を人間にもたらすために自由意志が与えられたとし、論点を罰より神が人間に与える賞賛の方に、つまり人間が受けるものに重きを置いているように思われる。

4.5 自由意志の特性（中間善であるか否か）

アウグスティヌスは自由意志の性質を語るに際し、それは中間善であるという。ではルイスは自由意志を、どのような性質のものと見ているのか。

人間には自由意志というものがあるため、彼に与えられるものはすべていわば両刃の剣だということも、あちこちで言ったと思います⁴³。

ルイスは、自由意志は両刃の剣であるという。それはどのような意味なのか。

キリスト教は神の善を確信し、「神はすべてのものを善きものとして、そのもの自体によかれと願ってつくられた。けれどもそうした善きも

のの一つである理性的動物の自由意志は、それ自身の性質のゆえに悪の可能性を含んでいた。そしてその動物——人間——は、この可能性を自らのために用いて悪しきものとなってしまった⁴⁴。」

ルイスは、自由意志はそれ自体善いものであるというが、悪を選択する可能性があるという。『キリスト教の精髄』では、善を行う自由を持つ者は悪を行う自由を持っているはずであり、自由意志が悪を存在させたという⁴⁵。では、自由意志を正しく用いた場合はどうなるとルイスは考えていたのだろうか。

創造主によって与えられた自由意志がこのように喜び喜ばれる服従において、再び全き献げものとして被造物によって献げられるとき、そこにこそ、疑いも無く天国があるのであり、聖霊が働きたまうのです⁴⁶。

ルイスは自由意志によって天国が開けるという。自由意志を正しく用いれば人間の最高度の幸福に寄与することを示唆する。そして、ルイスはそれを誤用した場合にも触れている。

世界を救おうとする神の努力は、個々の魂に関するかぎり、必ずしも成功するとは確信できないという結論が出るわけです。つまり、ある者は救われないということになるのです⁴⁷。

神は善であり世界を救う努力をするが、人が自らの自由意志で悪を選択した場合、その努力は必ずしも成功を収めることができないとする。自由意志は正しく用いれば幸福をもたらすが、ひとたび誤用すれば困難を招き入れるという意味で自由意志は両刃

⁴¹ C.S.ルイス著、本田峰子訳『偉大なる奇跡』新教出版社、1998、p.221。

⁴² C.S.ルイス著、中村妙子訳『悪魔の手紙』平凡社ライブラリー、2006、p.23。

⁴³ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p.153。

⁴⁴ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p.85。

⁴⁵ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、2009 改訂版、p.88。

⁴⁶ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』新教出版社、2012 改訂新装版、p.115。

⁴⁷ 同上、p.153。

の剣というのだろう。ここまで見てきたことからするとルイスの自由意志は両刃の剣であるという意見は、アウグスティヌスの自由意志は中間善であるという見解を受け継いでいると言えるであろう。

4.6 悪魔と自由意志

アダムに関しては、4.1 や 4.3 において、ルイスの考えとアウグスティヌスの考えは一致していることが確認されたが、誘惑者である悪魔について、ルイスはどのような意見を持っているのであろうか、以下に見てみたい。

だれにせよ、自己というものを意識した瞬間、自分が何よりも一番可愛い、——自分が世界の中心になりたい、いやはっきりいって神になりたいという、そういった気持ちを抱く可能性が生じる。これがまさにサタンの罪であり、また彼が人類に教えた罪だったのである⁴⁸。

自分が一番になりたいという考えがサタンの罪であるとルイスはいう。このことは高慢と関連している。高慢、または傲慢とはおごり高ぶることである⁴⁹。その高慢により悪魔は天において自由意志を濫用した、とルイスは考える⁵⁰。このことはサタンの罪を高慢に帰し、それにより自由意志の濫用に至ったというアウグスティヌスと一致するように思われる。

5.終わりに

ここまで、ルイスの考える自由意志を、創世記とアウグスティヌスの自由意志に関する見解を通して検証してきた。ルイスは、アダムが罪を犯し人間に痛みを生じさせた理由をアダムの自由意志の濫用に求める。また、そのことはクリスチャンにとって自明のことであるとする。自由意志を働かすためには対象が必要であり、それは被造物が神を神として認識することであった。善なる神が人間に自由意志を

与えた理由は、神は人形やロボットを愛そうというのではなく、意志を持った被造物を愛の対象に欲したため、そのことが人間の最高度の幸福であるためであった。また自由意志によって幸福、不幸の選択が可能であるため、ルイスはそれを両刃の剣であるとしたことも確認された。悪魔の罪は高慢によるものであり、ルイスは悪魔が天において自由意志を濫用したと考えていることも見た。これらのことは聖書の記述や初期教父であるアウグスティヌスと一致するところであり、ルイスのキリスト教観はこの点で聖書的かつ伝統的で、宗派に偏らない正統派のそれであり、自由意志をめぐるルイスの見解もまた彼の目指した生一本のキリスト教（mere Christianity）を彷彿とさせるものである。

(Received: September 30, 2013)

(Issued in internet Edition: November 1, 2013)

⁴⁸ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、p.90。

⁴⁹ 広辞苑 第六版、岩波書店、2008。

⁵⁰ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、p.88。